

# 令和7年度岩手県小・中学校学習定着度状況調査の結果について

岩手県教育委員会事務局  
学校教育室学力向上担当

## I 調査概要

### 1 目的

各小・中・義務教育学校において、児童生徒一人ひとりの学習の定着状況と分析結果からつまづきの内容や要因等を把握し、一人ひとりを伸ばす指導の充実を図る。また、明らかになった学習指導上の問題点を、各種研修会や学校訪問指導等の様々な教育施策に反映させることにより、本県すべての教員の指導力向上に資する。

### 2 調査対象

調査内容	実施日	調査対象	対象校	対象人数
教科調査 児童生徒質問調査	10月1日(水)	公立小学校第5学年・義務教育学校第5学年	258校	8,653人
		公立中学校第2学年・義務教育学校第8学年	143校	9,052人
学校質問調査 (Microsoft Forms での オンライン回答)	9月24日(水) ~10月1日(水)	公立小学校及び義務教育学校(前期課程)	258校	-
		公立中学校及び義務教育学校(後期課程)	143校	-

### 3 実施状況

実施学年(実施校数)	教科調査①	教科調査②	児童生徒質問調査	学校質問調査
小学校第5学年(258校)	国語 8,154人	算数 8,125人	8,157人	258校
中学校第2学年(143校)	英語 8,041人	数学 8,033人	7,997人	143校

## II 結果概要

### 1 教科調査の結果

#### (1) 各教科の平均正答率及び観点別平均正答率 ( ) はR6との比較

学年	教科	平均正答率	知識・技能	思考・判断・表現
小学校5年生	国語	62.7% (△4.1)	66.3% (▼ 0.9)	60.5% (△ 7.2)
	算数	51.6% (△1.4)	53.5% (▼ 7.7)	48.6% (△ 7.1)
中学校2年生	英語	37.2% (▼6.8)	41.0% (▼ 5.4)	33.5% (▼ 8.8)
	数学	45.2% (△1.8)	46.6% (▼ 6.0)	40.9% (△11.3)

## (2) 小学校5年国語

### ①観点・領域等の平均正答率、分布状況 ( )内はR6

観点・領域等	平均正答率	R6との比較
知識・技能	9問 66.3% (67.2%)	▼ 0.9
思考・判断・表現 (話すこと・聞くこと)	4問 64.2% (57.0%)	△ 7.2
思考・判断・表現 (書くこと)	4問 63.0% (55.8%)	△ 7.2
思考・判断・表現 (読むこと)	7問 56.9% (49.8%)	△ 7.1



令和6年度と比較し、観点別では「思考・判断・表現」が各領域とも7ポイント程度上回っています。一方で、「知識・技能」は全体で0.9ポイント下回っており、令和7年度の特徴として、文脈に沿って語句や漢字を適切に使うことに課題が見られました。これらは、言語能力の重要な要素であり、全ての教科の学習を支える基盤です。生きて働く「知識及び技能」として習得することが重要となるため、言語活動の充実を図る中で、児童の興味・関心や学習の必要に応じて語句の使い方を吟味したり、漢字を適切に使ったりする場面を設定し、習得した語句や漢字を活用するよう働きかけるなど、指導の工夫が必要となります。

### ②主な調査問題の状況 (○改善、◇改善傾向、●課題が継続、△▼はR6県学調との比較により増減を表す)

ア [知識及び技能]	R6	R7	比較
● 文脈に沿って、語句を適切に使う。(対義語)	80.7%	72.3%	▼8.4
● 文脈に沿って、漢字を適切に使う。	75.0%	53.6%	▼21.4
○ 漢字の由来、特質について理解する。	46.0%	73.9%	△27.9
● 修飾と被修飾との関係を理解する。<経年>	39.6%	50.2%	△10.6
イ [思考力、判断力、表現力等] (話すこと・聞くこと)			
○ 意図に応じて、質問を工夫する。	69.0%	77.5%	△ 8.5
ウ [思考力、判断力、表現力等] (書くこと)			
● 自分の考えを伝えるための書き表し方を工夫する。	57.2%	61.2%	△ 4.0
○ 文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文章を整える。	60.9%	69.1%	△ 8.2
○ 自分の考えとそれを支える理由との関係を明確にして文章を書く。<経年>	47.6%	59.7%	△12.1
エ [思考力、判断力、表現力等] (読むこと)			
● 場面の展開を捉えて読む。<経年>	73.1%	56.1%	▼17.0
● 登場人物の心情について、描写を基に捉えて読む。※3(5)①	44.0%	26.8%	▼17.2
○ 登場人物の心情について、描写を基に捉えて読む。※3(5)②	30.2%	80.9%	△50.7
● 段落相互の関係に着目して読む。<経年>	52.9%	52.1%	▼ 0.8

### (3) 小学校5年算数

#### ①観点・領域等の平均正答率、分布状況 ( )内 R6

観点・領域等	平均正答率	R6との比較
数と計算	12問 49.8% (53.8%)	▼ 4.0
図形	5問 60.4% (55.2%)	△ 5.2
変化と関係	3問 41.2% (53.9%)	▼ 12.7
データの活用	3問 52.8% (50.4%)	△ 2.4
知識・技能	13問 53.5% (61.2%)	▼ 7.7
思考・判断・表現	10問 48.6% (41.5%)	△ 7.1



令和6年度と比較し、観点別では「思考・判断・表現」が7ポイント程度上回っています。一方で、「知識・技能」は7.7ポイント下回っています。領域別では「数と計算」が4ポイント、「変化と関係」が12.7ポイント下回っています。「数と計算」領域では、小数倍の場面の数量関係の理解や、2つのものの基準量と比較量から割合を求めて説明することに課題があることから、比較量を求めるにはかけ算、基準量や倍を求めるにはわり算を用いるという個別の知識として捉えるのではなく、これらを相互に関連付けて、数量の関係を捉えられるようにする指導の充実が急務です。また、変化と関係では、ともなって変わる2つの数量の関係を理解し、求めたい数量の大きさの求め方を説明することに課題があることから、表で表された数量の意味を読み取り、変化や対応の規則性などの関係を見付け、求めるために用いるものと用い方を表現する指導の充実が必要です。

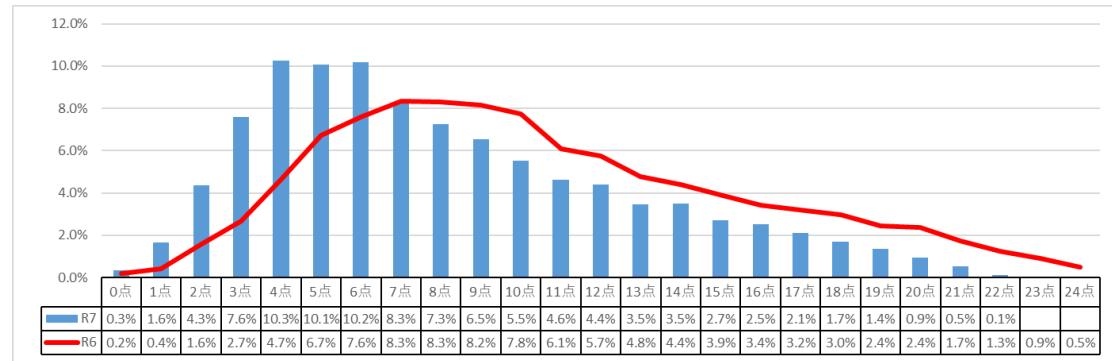
#### ②主な調査問題の状況 (○改善、◇改善傾向、●課題が継続、△▼はR6県学調との比較により増減を表す)

ア [数と計算]	R6	R7	比較
● 除法における余りの処理について理解し、示された条件に合う文章問題を選んでいる。【思】	-	46.8%	-
● 小数倍の場面の数量の関係を、□を使った式に表すことができる。【知】	-	60.5%	-
● 2つのものの基準量と比較量から割合を求めて、ねだんがより高くなったパンはどちらかを説明することができる。<経年>【思】	26.3%	30.7%	△ 4.4
○ 3つの数の最小公倍数の求め方を理解している。【知】	-	75.0%	-
◇ 四捨五入した場合の見積もりの仕方を理解している。<経年>【知】	45.2%	60.4%	△ 15.2
● 小数の除法の式の意味を理解している。<経年>【知】	33.5%	27.3%	▼ 6.2
イ [図形]			
○ 角度を求める式に合った、三角定規を組み合わせた形を選んでいる。<経年>【思】	59.0%	71.5%	△ 12.5
ウ [変化と関係]			
● ともなって変わる2つの数量の関係を理解している。【知】	-	27.0%	-
● ともなって変わる2つの数量の関係を理解し、求めたい数量の大きさの求め方を説明することができる。<経年>【思】	29.7%	27.4%	▼ 2.3
エ [データの活用]			
○ 二次元表にあてはまる数を式に表すことができる。<経年>【知】	11.2%	73.3%	△ 62.1
○ 2つの折れ線グラフを読み取り、それを根拠に、示された事柄が正しくない理由を説明することができる。<経年>【思】	17.7%	40.7%	△ 23.0

#### (4) 中学校2年英語

##### ①観点・領域等の平均正答率、分布状況 ( )内はR6

観点・領域等		平均正答率	R6との比較
聞くこと	6問	42.2% (60.9%)	▼18.7
読むこと	6問	43.5% (44.4%)	▼ 0.9
書くこと	10問	30.5% (33.5%)	▼ 3.0
知識・技能	11問	41.0% (46.4%)	▼ 5.4
思考・判断・表現	11問	33.5% (42.3%)	▼ 8.8



令和6年度と比較し、全ての観点・領域で平均正答率が低下しました。特に「聞くこと」は18.7ポイントと大幅に減少しており、早急な指導改善が必要です。デジタル教科書や音声データ等を活用し、生徒が各自のペースで語句や表現などを確認したり、聞き取れなかった語句や表現を確認したりできるようにする必要です。

「読むこと」は、文章の概要や要点を捉えることについて、依然として課題が継続しています。段落内の文と文との関係を読み取りながら、各段落の主な内容を捉えたり、文章全体を通して読み、複数の情報の中から書き手が最も伝えたいことは何かを判断して捉えたりすることが必要です。

「書くこと」は、特に文法指導について、形や構造の習得にとどまらず、文法がコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、コミュニケーションの目的を達成する上で文法事項を使うことの必要性や有用性を生徒が実感することが求められます。その上で、文法知識を活用した言語活動を繰り返し行い、規則性や構造への気づきを促すなど、言語活動と結び付けた指導を充実させることが必要です。

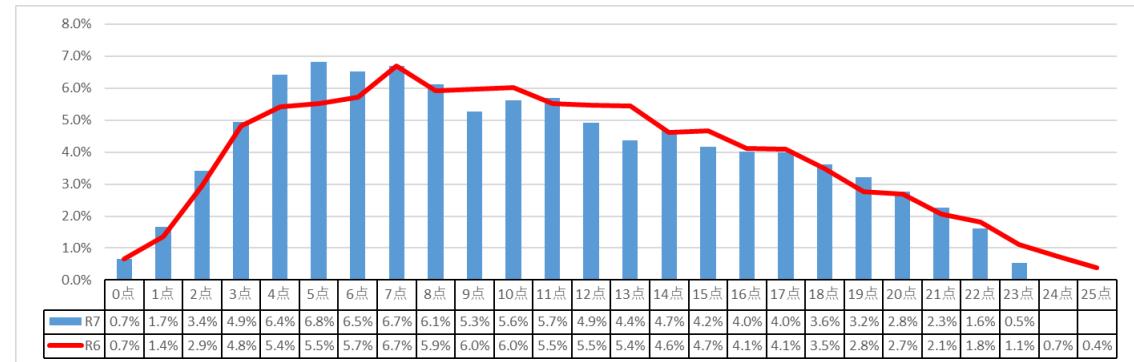
##### ②主な調査問題の状況 (○改善、◇改善傾向、●課題が継続、△▼はR6県学調との比較により増減を表す)

	R6	R7	比較
<b>聞くこと</b>			
● ある状況を描写する英語を聞き、情報を正確に聞き取ることができるかどうかをみる。【知】	87.9%	54.7%	▼33.2
● 持ち物についての対話を聞き、情報を正確に聞き取ることができるかどうかをみる。【知】	70.3%	45.7%	▼24.6
● 日常的な話題について、対話を聞き、対話の概要を捉えて適切な応答を選ぶことができるかどうかをみる。【思】	62.8%	25.2%	▼37.6
◇ 日常的な話題について、目的に応じて英語を聞き、必要な情報を聞き取ることができるかどうかをみる。【思】	33.6%	47.7%	△14.1
<b>読むこと</b>			
○ 日常的な話題について、短い文章を読み、情報を正確に読み取ることができるかどうかをみる。【知】	-	65.1%	-
◇ 文と文との関係を正確に読み取ることができるかどうかをみる。【知】	26.7%	45.7%	△19.0
● 日常的な話題について、短い文章の概要（文章全体の大まかな内容）を捉えることができるかどうかをみる。【思】	21.3%	29.5%	△ 8.2
● 社会的な話題について、短い文章の要点（書き手の最も伝えたい内容）を捉えることができるかどうかをみる。【思】	42.8%	41.2%	▼ 1.6
<b>書くこと</b>			
● 社会的な話題に関して読んだことについて、自分の考えを書くことができるかどうかをみる。【思】	32.2%	19.8%	▼12.4
○ How many ではじまる疑問文の語順を理解し、正確に書くことができるかどうかをみる。【知】	-	64.6%	-
● テーマに沿って、3文以上のまとめのある英文を書くことができるかどうかをみる。【思】	20.4%	22.0%	△ 1.6
● 過去進行形を含む文を正確に書くことができるかどうかをみる。【知】	-	5.3%	-

## (5) 中学校2年数学

### ①観点・領域等の平均正答率、分布状況 ( )内はR6

観点・領域等	平均正答率	R6との比較
数と式	8問 45.6% (43.6%)	△ 2.0
図形	5問 43.0% (30.2%)	△ 12.8
関数	6問 46.6% (51.9%)	▼ 5.3
データの活用	4問 44.7% (50.2%)	▼ 5.5
知識・技能	17問 46.6% (52.6%)	▼ 6.0
思考・判断・表現	6問 40.9% (29.6%)	△ 11.3



「思考・判断・表現」で、文字式を用いて説明することが改善しつつありますが、一方、「知識・技能」では、関数や相対度数の意味を理解することに課題が見られるなど、課題が継続しています。事実的知識の暗記にとどまらず、個別の知識や技能を関連付け、深い理解を図ることについて指導の充実を今後も重視して、複数の問題を通して実感を伴ったりしながら意味や概念を理解できるようにする指導改善が急務です。

### ②主な調査問題の状況 (○改善、◇改善傾向、●課題が継続、△▼はR6県学調との比較により増減を表す)

ア [数と式]	R6	R7	比較
● 具体的な場面で正の数と負の数を用いて表したり処理したりすることができる。<経年>【知】	47.6%	48.3%	△ 0.7
● 与えられた文字式で、正しく計算ができる。<経年R5>【知】	-	52.5%	-
● 簡単な一元一次方程式を解くことができる。【知】	65.4%	66.2%	△ 0.8
● 等式を、目的に応じて変形することができる。<経年>【知】	31.1%	29.4%	▼ 1.7
◇ 連続する3つの自然数の和について成り立つ事柄を説明することができる。【思】	19.5%	32.5%	△ 13.0
イ [図形]			
◇ 折り目の線と角の二等分線の関係を理解している。<経年>【思】	36.0%	39.3%	△ 3.3
● 空間図形を直線や平面図形の運動によって構成されるものと捉えることができる。	-	31.7%	-
○ 円錐の側面積の求め方を展開図を用いて考察し、おうぎ形の面積を円の面積の一部として表現することができる。【思】	-	53.5%	-
ウ [関数]			
○ 1次関数の変化の割合を求めることができる。【知】	-	61.0%	-
● グラフが表す式を求めることができる。<経年>【知】	50.8%	39.0%	▼ 11.8
● 関数の意味を理解している。【知】	-	50.4%	-
エ [データの活用]			
◇ 2つのヒストグラムを比較し、どちらを選ぶか判断し、その理由を説明することができる。<経年R5>【思】	-	51.8%	-
● 多数回の試行の結果から得られる相対度数の意味を理解している。【知】	-	19.4%	-

## 2 児童生徒質問調査・学校質問調査の結果（詳細は別添資料）

（1）「いわて県民計画（2019～2028）」第2期アクションプランに掲げる指標について ※□は目標値と同値または上回った回答率

### ①「確かな学力の育成」に係る項目

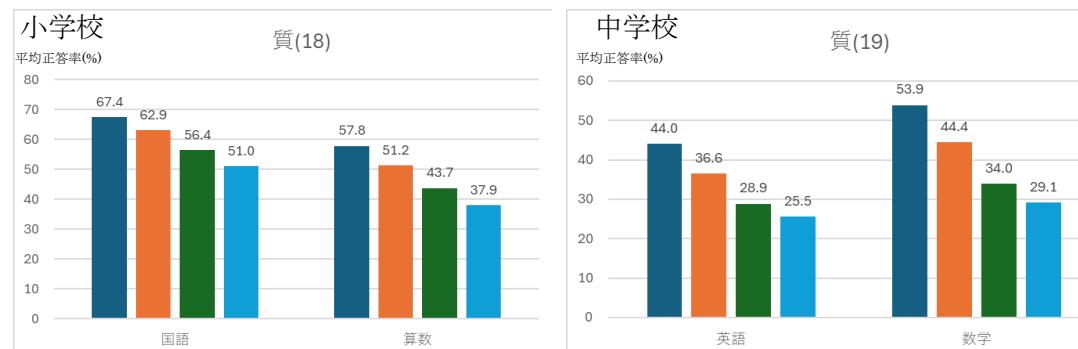
調査対象	質問項目	小学校			中学校		
		R6	R7	R7目標値	R6	R7	R7目標値
学校	教育課程全体で「話すこと」、「書くこと」等の言語活動の充実及び徹底を図っていますか。（積極肯定回答）	47%	52%	52%	40%	48%	44%
学校	学校では、児童生徒の資質・能力の向上に向けて、確かな学力育成プランに基づいて組織的に取り組んでいますか。（積極肯定回答）	69%	75%	66%	51%	58%	55%
学校	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をもとに幼児児童の姿について（就学前教育施設職員と小学校教員が）共有し、小学校の授業に生かしていますか。（肯定回答）	87%	87%	90%	-	-	-
学校	諸調査の結果や日々の授業から明らかになった児童生徒のつまずきに着目した授業改善を行っていますか。（積極肯定回答）	51%	57%	56%	30%	44%	46%
児童生徒	学校の宿題だけでなく、自主学習に取り組んでいますか。（自主学習とは、自分で学習内容を決めて取り組むことを意味します）（肯定回答）	59%	56%	65%	52%	48%	59%

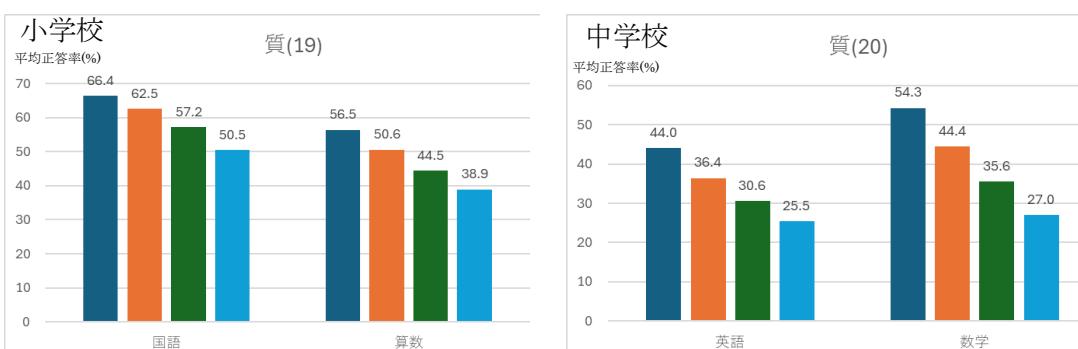
### ②「岩手で、世界で活躍する人材の育成」、「豊かな心の育成」、「いじめ問題・不登校対策等への確かな対応」に係る項目

調査対象	質問項目	小学校			中学校		
		R6	R7	R7目標値	R6	R7	R7目標値
児童生徒	自分の住む地域には、良いところがあると思いますか。（肯定回答）	93%	94%	73%	88%	90%	59%
児童生徒	人が困っているときは、進んで助けようと思いますか。（積極肯定回答）	65%	63%	70%	65%	62%	68%
児童生徒	授業や学級活動の話し合いなどで、自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか。（肯定回答）	73%	73%	79%	76%	76%	83%
児童生徒	学校や地域が行う体験活動では、達成した喜びややりがいなどを感じることができましたか。（肯定回答）	90%	91%	87%	89%	90%	87%
児童生徒	学校で行う鑑賞教室や文化芸術に関する学習、地域に伝わる伝統活動などを通じて、文化芸術への興味がわきましたか。（肯定回答）	71%	71%	74%	65%	67%	71%
児童生徒	児童（生徒）会活動や学級活動などで、学級生活をよりよくするために話し合い、互いのよさを生かして解決方法を決めていますか。（肯定回答）	86%	86%	85%	88%	89%	85%
児童生徒	学校に行くのは楽しいと思いますか。（肯定回答）	85%	85%	90%	86%	88%	89%
児童生徒	スマートフォンやインターネットを使うときは、危険に巻き込まれる可能性等があることを理解していますか。（肯定回答）	97%	97%	100%	98%	99%	100%

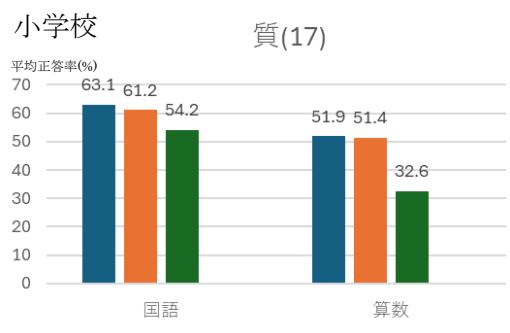
## (2) 児童生徒の学習や生活、学校の取組について

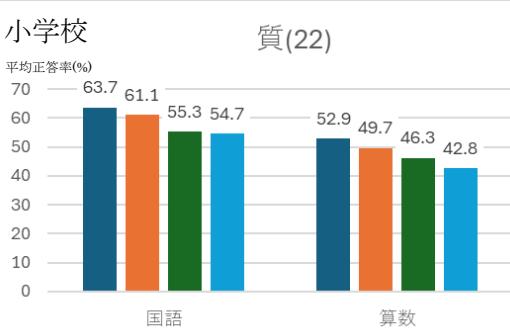
### ①授業において、児童生徒が学びを深めたり、考えを表現したりする活動や指導に係わる主な項目

児童生徒	授業中、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいると思いますか。					
肯定回答 (積極的肯定回答)	小学校	79% (32%)	小学校 質(18)		中学校 質(19)	
	中学校	80% (32%)	平均正答率(%)	平均正答率(%)	平均正答率(%)	平均正答率(%)
同一集団経年比較 (中2) R6(4月)→R7(10月) : 88%→80% (▼8ポイント) ※参考 R5(4月)→R6(10月) : 86%→80% (▼6ポイント)						
						
本項目に肯定的に回答した児童生徒の割合は、昨年度と同様の傾向である。しかし、同一集団経年比較では入学時から8ポイント減少しており、前年度の生徒と比較しても減少の幅が大きくなっている。本項目で肯定的に捉えている児童生徒ほど平均正答率が高い傾向がみられることから、児童生徒が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働きかせながら、問題を見いだして解決策を考える等の学習過程を重視した学習の充実を図る必要がある。						

児童生徒	学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができますか。					
肯定回答 (積極的肯定回答)	小学校	82% (36%)	小学校 質(19)		中学校 質(20)	
	中学校	77% (32%)	平均正答率(%)	平均正答率(%)	平均正答率(%)	平均正答率(%)
学校質問調査から 授業で行う振り返りは、児童生徒自身が学習の成果（または課題）を実感できる振り返りとなるよう、組織的に取り組んでいますか。 ※肯定回答割合、（ ）は積極肯定回答割合 小学校 : 99.2% (64.3%) 中学校 : 98.0% (48.3%)						
						
本項目を肯定的に回答している児童生徒ほど平均正答率が高い傾向にある。また、「1 そう思う」(積極的回答)と回答している児童生徒の平均正答率は、他の質問項目における積極的回答をした児童生徒の平均正答率の中でも高い方にある。深い理解を伴う知識の習得につなげていくため、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、知識を他の学習や生活の場面で活用できるようにしたりするよう、「学習の振り返り」の質的改善を進め、次の学習につなげなるものにしていくことが大切である。						

## ② 学校の組織的取組に係わる主な項目

学校	学校では、児童生徒の資質・能力の育成に向けて、「確かな学力育成プラン」に基づいて組織的に取り組んでいますか。※再掲												
肯定回答 (積極肯定回答)	小学校	99.6% (75.2%)	小学校 質(17)				中学校 質(17)						
	中学校	99.3% (58.0%)											
R6 の状況		R6 の状況											
小学校 99.3% (69.2%)		小学校 99.3% (69.2%)											
中学校 98.6% (51.4%)		中学校 98.6% (51.4%)											
<p>本項目にはほぼすべての学校が肯定回答となり、積極肯定回答した学校の割合は増加した。本調査を含め、様々な調査を活用しすべての学校が児童生徒一人ひとりの学習の定着状況と分析結果からつまづきの内容や要因等を把握し、一人ひとりを伸ばす指導の充実を図ることが求められる。</p>													

学校	年間に複数回C A P Dサイクルが回るよう計画していますか。												
肯定回答 (積極肯定回答)	小学校	98.1% (63.2%)	小学校 質(22)				中学校 質(22)						
	中学校	91.7% (47.6%)											
R6 の状況		R6 の状況											
小学校 95.1% (58.3%)		小学校 95.1% (58.3%)											
中学校 89.6% (36.8%)		中学校 89.6% (36.8%)											
<p>本項目に積極肯定回答した学校は増加している。中学校は相関が見られない。学校が児童生徒の学習状況を把握し、改善に向かう取組をより効果的なものとするために、各教科等で課題となっている内容に関する教材分析、指導改善を一層重視し、C A P Dサイクルの質を高めるようにする必要がある。</p>													

### 3 調査結果から

#### (1) 各学校における授業改善の状況について

- ① 前年度の調査のねらいと同じねらいの問題（43問）については定着が図られていたり、改善が見られたりしている問題（27問）が見られ、各校における検証改善サイクルの取組や調査問題の積極的な活用の成果が表れている。
- ② 評価の観点が思考・判断・表現の正答率は前年度の調査を上回っていることから、習得した基礎的な知識及び技能を活用して課題を解決する授業や評価問題等の実践が進んだものと考えられる。一方、評価の観点が知識・技能の正答率は調査したすべての教科で前年度の調査より下回っている。
- ③ 中学校英語の分布状況や中央値と平均正答率の差などから、各教科等の内容、育成を目指す資質・能力について、学習指導要領の内容に立ち返り、「何ができるようになればよいか」の面から小問レベルで目指す姿を具体的に想定し、今求められている資質・能力を確実に育成できるようにする必要がある。
- ④ 児童生徒質問調査の「授業中、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいると思いますか。」「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができますか。」の回答別の平均正答率に相関が見られる。
- ⑤ 学校質問調査の「学校の組織的な取組について」は、小・中学校ともに積極肯定回答が増加している。特に、学校教育指導指針に示す「検証改善サイクル確立のためのポイント」については、すべての項目で増加し、確かな学力育成プランに基づく取組が学校全体で共有され、組織的な改善取組としてほぼ確立できている。今後は、つまずきを生かした児童生徒一人ひとりの資質・向上という目標に向かって、確かな学力育成に効果的に結びつくように、CAPDサイクルの質を高める必要がある。

#### (2) 今後の取組について

令和7年9月24日付け教学第1116号「令和7年度全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた当面の対応について（通知）」で示した取組を重視し、引き続き各県公所及び市町村教育委員会の指導主事との連携を図り、各学校における児童生徒のつまずきに着目した授業改善を支援するために以下の取組を進めていく。

- ① 本調査の分析・検証の結果については、年内に学校全体で共有し、成果が見られる事項は引き続き取り組み、課題が見られる事項は組織的対応によって取組の改善を図るなど、各学校が検証改善サイクルを推進し、特に本調査対象の児童生徒が各教科等の学習内容をしっかり身に付けて進級できるようにするとともに、全学年・全教科の指導改善につながるよう支援を強化する。
- ② 本調査等の結果分析を踏まえ、各教科等の内容、育成を目指す資質・能力について、学習指導要領の内容を今一度確認し、「何ができるようになればよいか」の面から小問レベルで具体的に目指す姿を想定し、学習評価の充実を重視する。そのうえで、今求められている資質・能力を確実に育成できるような改善策を検討し、英語「話すこと」や「知識・技能」で個別の知識や技能を相互に関連付け、児童生徒が深い理解へとつなげられるような改善方策例を示し、各学校がCAPDサイクルの質を高め、指導改善に一層取り組めるようにする。
- ③ 別添「授業改善の手引き」を活用し、各学校が「授業実践アイディア例」を参考にして各教科等で積極的に指導改善できるようにする。